

●礼装

□未婚女性・・・・・・・・・**本振袖**（黒地のものを黒振袖、 黒地以外のものを色振袖）

○本振袖は裾ふきと袖口ふきが厚く、着物の丈も長く裾を引いて着ることができる

○裾ふき・袖口ふきとは裾と袖口の、裏布を表に折り返して縁のように仕立ててある部分
（大振袖では、ふきに真綿が入る。）



（中振袖）



○裾まわし（八掛）とは、衿の着物の裾と袖口につける裏地のこと

（大振袖では、表生地と同じ布地で、同じに染めたものを使うので、『共八掛』とよぶ

□既婚女性・・・・・・・・・**黒留袖**（黒留袖は、結婚式列席の親族、仲人婦人が着用する）

（江戸袷・・・腰から裾にかけてだけ模様をつけた着物を江戸袷模様とよんだことから、現在は黒留袖を江戸袷ともいう。）



○留袖は、黒地または色地の腰から裾にかけてだけ模様があるので、裾模様とよぶこともある

○本来は2枚重ねて着ていたが、現在では比翼仕立てのものが多く用いられる

（『比翼仕立て』・・・襟、袖口などを二重にした仕立て方。2枚の着物を重ねて着ているように見える）

○黒地以外の留袖は色留袖とよばれ、既婚女性に限らず着用できる

○黒留袖が染抜きの五つ紋であるのに対し、色留袖は染抜き五つ紋・三つ紋・一つ紋がある。

色留袖の五つ紋は黒留袖と同格である

（五つ紋は、背縫いを中心にした背紋と、左右の後ろ袖、両胸に紋をつける第一礼装）

○第一礼装には、白の半襟を用いる

○帯は現在では格の高い袋帯を使用することが多い

◇男子礼装・・・・・・・・・・染抜き五つ紋付き、黒羽二重の着物と羽織、それに仙台平などの縞の袴姿が

男子第一礼装として、既婚・未婚の区別なく、また慶弔の違いもほとんどなく
婚礼や成人式などに着用されている。



○帯は角帯を用いる

○足袋はキャラコやブロード地のものが普通で、草履は布製の鼻緒の
畳表のものが用いられる。足袋、草履の鼻緒は白が一般的に用いられる

◇礼装生地

女子・・・・・・・・・・緞子、紋綸子、縮緬などを用い、夏物では、絹あるいは紗が用いられる
(全体に模様が配置されたもの→→総模様
腰から裾にかけて模様のあるもの→裾模様)

絹・・・縦または横方向に透き目のある絹着物

紗・・・絹よりも透き目が多く、軽くて薄い絹着物

男子・・・・・・・・・・黒羽二重が正式とされる。 夏は絹

◇準礼装

女性の準礼装として、未婚、既婚を問わず着用できるものに、色無地紋付き、訪問着、
付け下げなどがある。

◇礼服の心得

- ・礼装の着物を選ぶ時は、品位を重んじ、華美にならないように注意する
相手との関係、自分の立場、儀式的主旨を考え、常に主役を引き立て、自分だけ
着飾ることのないようにする。
- ・葬儀に際しては、近親者及び特別な関係の者は、喪服に喪章をつけて、喪に服する
気持ちを表す。それ以外の者は、喪服を着た場合には喪章をつけない。
和服については黒の喪服を用いる

●着物と季節

- 10月～5月・・・・・・・・・・袴 (裏つきの着物である)
- 6月と9月・・・・・・・・・・単衣 (裏地をつけない着物)
- 7月～8月・・・・・・・・・・うすもの (絹、紗、夏大島など)

●着物のいろいろ

礼装・・・・・・・・・・振袖 ・ 留袖

準礼装・・・・・・・・訪問着 (絵羽模様の着物 / 絵羽模様とは仮縫いをして模様を合わせるため、
縫い目のところも柄が続いて全体が一枚の絵のようにになっている模様のこと)
付け下げ (肩山と袖山を頂点として、裾から上向きの模様を、前・後の身頃につけたもの
計算して模様を染める。工程が訪問着よりも少ないので、格が下になる)
色無地 (黒以外で染めた、無地の着物。紋をつければ準礼装。紋がなければ
おしゃれ着、普段着になる。)

おしゃれ着・・・小紋 ・ 紬(つむぎ)

- 帯
 - 帯には柄のつき方によって全通と六通がある。全通は帯全体に柄があり、六通は胴の1巻き分の長さに柄の入っていないものである。
 - 丸帯・・・・・・帯幅が普通の2倍に織られているので広帯ともいう。
 - 帯の中で最も格調高い
 - 主に花嫁衣裳に用いられるが、留袖にも使われることがある。
 - 袋帯・・・・・・帯地を袋状に織った、あるいは表地と裏地を袋状に仕立てた帯
 - 礼装用から外出用まで幅広く用いられる
 - 名古屋帯・・・お太鼓になる部分を普通幅、胴に巻く部分を半幅に仕立てた帯
 - 半幅帯・・・・・・仕立て上がりの帯幅が通常の半分の15cmである。
 - 細帯・・・・・・半幅以下の帯幅の細い帯
 - 角帯・・・・・・男性用帯
 - 兵児帯・・・・・・くつろいだ時に用いられる。幅広い布地の帯

●小物

- 帯締め・・・・・・帯がほどけないように、帯の上から締めるひも
- 帯留め・・・・・・帯締めにつける装飾品
- 帯枕・・・・・・帯枕の上に掛けて用いる
 - (絞り染、ぼかし染、無地等があり、着物や帯の色に合わせて色を選ぶ)
 - (礼装用として、慶事には白無地を用いる)
- しごき (扱き帯)・・・花嫁衣裳や七五三女兒の祝着などの礼装に用いる飾り帯
- 抱え帯 (平ぐけ帯)・・・しごきと同じ用途に使う帯
- 懐剣・・・・・・護身用の短剣。花嫁衣裳で用いる
- 末広・・・・・・扇子の別名。慶事に用いられる。金を前にして帯に差す。
 - 花嫁、花婿と、親族、仲人、など留袖着用者が身につける。七五三にも用いる
- 筥迫・・・・・・紙、櫛、楊枝等を入れるもの
 - 花嫁や女子の七五三の晴着のときに用いられる
- 帯枕・・・・・・帯の形を整える道具



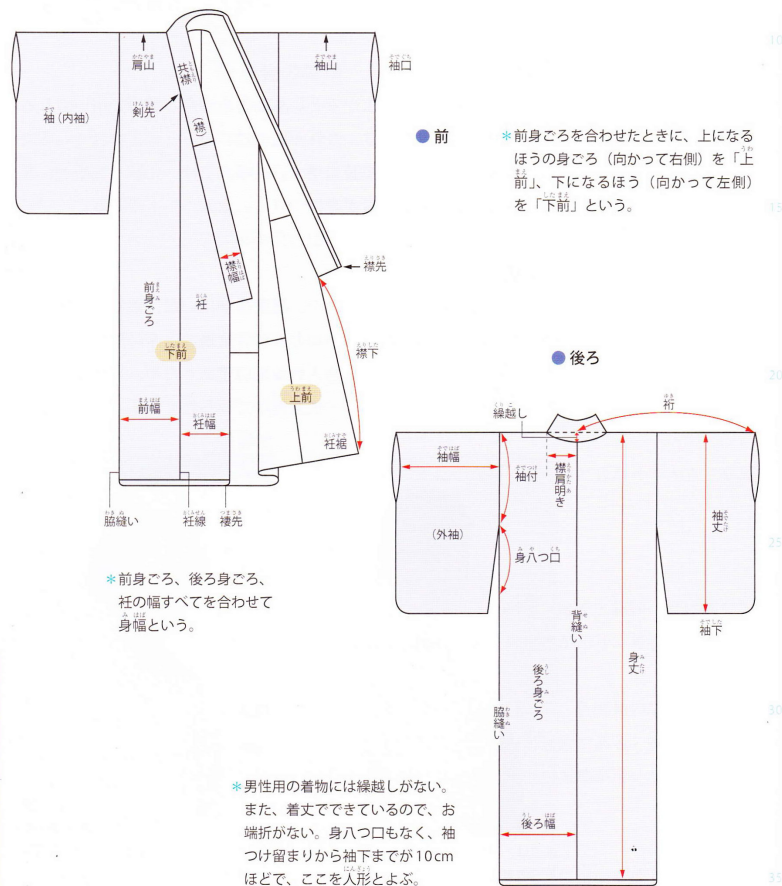
衣紋
 着物の襟合わせの部分、または襟を首の後ろで抜く部分のこと。主に後者を意味する。

衣紋の抜き
 基本は、衣紋と首の間ににぎりこぶし1個が入る程度。ただし、首が太く短めの場合は苦しく見えてしまうので、大きめに抜く。抜きすぎると下品に見えたり年配に見えるので、バランスをみて調節する。

※男性着付けでは、衣紋はぬかない。

※おはしより (お端折)
 男子着物は着丈で出来ているので、おはしよりは出来ない。

●着物各部の名称



●着物のたたみ方

- 本たたみ・・・・・・・・最も一般的なたたみ方であり、訪問着、付け下げなど、この方法でたたむ
- 夜具たたみ・・・・・・・・花嫁衣装、振袖、留袖などに行う。着物のしわを最小限に抑えるたたみ方

●着付けの一般的要領

- ひもの位置は着崩れをしないように、ひもの位置に注意することが大切である
- ひもを結ぶ位置は体の中心をさける。結び目が心臓部やミズオチ等の中心部にあたると、貧血を起こしたり、体の具合が悪くなる原因になるので注意する
- 黒留袖、色留袖等、紋の付いているものは、紋が隠れないように、また模様の主要な部分が隠れないように注意する
- 全体の調和をよく考える。衣紋の抜きや帯の折幅、結び方は、それぞれ、首の太さ、太っているかやせているか、小柄か大柄か、などを見ながら調整する必要がある。
- 体の極端な凹凸を修正し、着くずれを防ぐため、補整をする。補整は肌襦袢を着た上に行う

●袴

- 馬乗り袴・・・両足が分かれている（ズボンタイプ）
行燈袴・・・分かれていない（スカートタイプ）